

日露海戦史「幻の書」復刻

ロシア海軍軍令部が編集し和訳されたものの、幻の書とされてきた『千九百四年、五年露日海戦史』の全巻が発見され、芙蓉書房出版（東京）から復刻された。大正初期に編集されたため、共産主義や反日感情の影響を受けていない「知られざる日露戦史」。ロシア側に作戦段階で日本人の「殲滅」を唱える強硬論があったことや、旅順陥落前に日本との講和を検討していた史実が生々しくよみがえる。

■初弾は日本魚雷

当時、日本海軍軍令部は『露日海戦史』を入手し翻訳印刷した。しかし、日本側がロシア海軍と喧伝してきた初弾発砲が実は日本海軍の魚雷艇の魚雷（命中せず）だったことが明らかにされており、海軍内部の配布にとどめられた。

このため、防衛研究所や防衛大学校でも全巻はそろっていないかった。日露開戦百年を記念し、平間洋一元防衛大学校教授が調査した結果、財団法人三笠保存会と東京・九段の昭和館に全巻が保存され

ているのが分かった。

■開戦前

『露日海戦史』によると、ロシア海軍が対日戦争の図上演習を行ったのは一八九四年、一九〇〇年、〇二年、〇三年の四回。海軍力整備やシベリア鉄道の完成まで

開戦は回避すべきだとロシア側は考え、外交交渉で時間稼ぎを図っていた。

「さうしてこれを殲滅しないといけない」とまで記していた。

海軍事務局の作戦計画担当者ブルシロフ中佐は開戦前、日本海軍の方がロシア海軍より優勢だったため、「今後二カ年を経て日本に

対し宣戦するという堅き決心をもって、不撓不屈戦備をおさめるべきだ」と説いた。戦争は「日本人を撃破するだけでは不十分」で

■二〇三高地

記述は旅順陥落など陸上作戦にも及ぶ。日本側に多数の死傷者を

出した二〇三高地への肉弾作戦について、艦艇への着弾点を観測する「好地点を得て、三日間に第一

太平洋艦隊の戦力を全失せしめた」と分析、「肉弾的強襲の際にうむった損害を優に償えたといえる」と評価している。

コンドラチenko陸軍少将はステッセル大将に、旅順陥落前に講和条約を締結すれば「国民の自尊心を傷つけない条件」で講和も可能であろうと意見申し立てた。

旅順降伏の際、列席者の半数以上は、皆あくまで防衛を継続すべきだと主張した。が、旅順防衛陸軍参謀長のレイス大佐一人が「断然降伏説を主張」した。最後はステッセル大将がたれにも相談せずに

■東郷ターン

日本海軍で日本艦隊がロシアのバルチック艦隊に接近したとき、突然針路を変えた。東郷ターンについて「実に意想外で、はなはだしく乗員を歡喜せしめた」というのも「ロシア艦隊の弾着距離内」で「われに好個の目標を提供する」からだった。

英国のネルソン提督も「敵の縦貫射撃を喰い」てトラファルガーの海戦で勝利したが、「東郷（平八郎）提督の策戦」もネルソン提督と同じように「賢明にしてかつ勇敢なる行動」だったと最大の賞辞を贈っている。

「日本人殲滅を」強硬論 旅順陥落前の講和検討